

スタジオ夜話

第 151 スタジオ夜話

「Audio」について語る？Ⅲ

「趣味のオーディオ」趣味？？

☆ はじめに

12月にはいりました。今年も残すところ…ということになっています。地球温暖化の影響で夏は猛暑、冬は極寒（こっかん）と読む）いすれ夏の猛暑は酷暑にかわりまです。命に危険がある暑さです。では冬はとなると表現上では酷寒（こっかん）と読む）より何故か極寒の方が寒いらしい。とにかくこの冬はなんとか無事に暮らしたいものです。読者皆様はもう冬支度はお済ですか？筆者はとても寒がりなので前号でお話した通り既に冬支度が進んでいます。ワークマンのフリース、新しいバージョンも購入しました。前バージョンと比べるとこれがとても暖かい！とても安いので昨日追加購入しました。筆者は伊豆の山で暮らしていることが多く、東京にはひと月に数日程度の帰宅となっています。ワークマンのフリースは東京では人気で売り切れ、無い！のです。伊東にはあります（笑）。皆様も防寒対策はお早めに済ますことをお勧め致します。さて今回のスタジオ夜話は前回の続き「Audio」について語る？Ⅲ「趣味のオーディオ」になります。忖度の無いスタジオ夜話的なお話です。お付き合いのほどよろしく願いいたします。

☆ 「趣味のオーディオ」

スタジオ夜話では以前から「プロオーディオって…」というお話をしてきました。今回は視点をガラッと変えて「趣味のオーディオ」について夜話的にお話します。オーディオを趣味にしている人の数は減少の一途をたどっています。今やレトロおやじしかこの昭和の趣味をこよなく愛する者はいないのです。しかし最近若い人たちの間でもレコードやカセットに興味を持ち、レトロおやじが愛する「趣味のオーディオ」にもそれなりに良い風が吹いてきたのかなと思ってはいたのですが、どうやら筆者の思う「趣味のオーディオ」とは一線を画すようです。彼らはアナログなレコードやカセットはレトロでは無く、全く新しい面白いアイ

テムの登場と捉えているようです。「そんなんだ昔はこれだったんだ…」ぐらいの感があります。が今の若者は本質的に「Audio」の捉え方が違うのです。そんな彼らにレトロおやじがカートリッジが云々とかメタルテープにドルビーが云々と言ってもまるで通じないのです。稀にここからレトロおやじチックな「趣味のオーディオ」に足を踏み入れる変わり者？もいますが所詮少数派なのです。では今回のスタジオ夜話「趣味のオーディオ」のお話ってどんなお話なの？…。

☆ 「趣味のオーディオ」って何？

もっぱら好きな音楽を好きなオーディオ機器で楽しむこと、機器の自作などはこの趣味の世界でも究極に近い。また超高級機器に囲まれながら居心地の良いリスニングルームで至極の一時を過ごすのも究極といった感じです。一方「プロオーディオの世界」はこうした趣味の世界の人のためにコンテンツ制作や機器の設計販売などにたずさわる人の世界だということです。つまりマーケットでの考え方としては、オーディオの世界は「趣味のオーディオ」を中心に回っているといっても間違いではありません。プロを含め筆者も読者皆様も実はそんな世界の住民なのです。

☆ そんな世界とは？Ⅰ

今から40年以上前のお話です。筆者の使っていたミキシングコンソールはMCI社のJH600シリーズでした。当時としてはインライン方式のオートメーションを備えた優れもののコンソールです。マイクロフォンHA（ヘッドアンプ）はOPアンプで電子バランス入力でした。海外有名スタジオのエンジニアはHAの入力にJensenトランスを入れて使っていたこともあります。筆者はインプットモジュール2本にマリンエアーのトランスを入れて使っていました。電子バランスの入力と比較すると良し悪しは別として明らかに音の違いがありました。これが「そんな世界」の一例です。「趣味

のオーディオ」の世界です。この2本のモジュールはプロオーディオの世界では何の意味もありません。ただ違う音のモジュールを用意しただけの話です。プロの世界ではその後ニーヴやSSLが台頭してきます。何を勘違いしているのか理解できませんが、やれニーヴの音が良いとかSSLが良いとか言っていました…。それは「趣味のオーディオ」の世界での話です。本来のプロの世界の話ではありません。当時を思うとプロはそんな趣味的なことをもっともらしく言う評論家的な存在だったのです。「趣味のオーディオの世界」にもそれは多大な影響を与えていました。時代は混沌としていたのです。カオスなのです。

☆ そんな世界とは？Ⅱ

私たちの生活では例えばエアコンの「効きが悪い」になったらどうしますか？当然フィルターの掃除や機器の修理を行います。言い換えればこの場合エアコンが初期の性能を維持できなくなったことを意味します。筆者がこの世界入っておよそ10年、勤務先のコンソールが古くなりMCI社のJH600シリーズを導入することになったのですが、予算もあり全てのスタジオを更新するわけにはいきませんでした。そこで更新しないスタジオのコンソールを本気でメンテナンスすることにしました。はじめにすべてのモジュールのカップリングコンデンサーの交換です。時間をかけてのパーツの劣化はオーディオの世界ではなかなか気が付かないものです。劣化に耳が慣れ親しんでしまうからです。音が一変しました。正直に驚きました。しかし部品劣化した20年経過のコンソールが悪い音を出していたのか？といえそうでもないような気がします。まさにここがこの世界のカオスなところなのです。エアコンのパーツ劣化は「効きが悪い」となり、故障に近い状態です。メンテナンスする必要があります。がこのカオスな世界ではカップリングコンデンサーの劣化はかならずしも「故障」＝「音が悪い」という結果にはならないのです。

劣化にも限度はあります。本来劣化した部品はいち早く交換して初期性能を維持すべきであると思います。…のような気もします。高級なモニタースピーカーを鳴らすのにこの世界「趣味のオーディオ」の住人はアンプ接続にメートルあたり数万円のケーブルを平気で使っています。スピーカーの箱の中の配線材はせいぜい数百円、筆者はナンセンスと思いますが趣味のオーディオ世界では、「数百円の配線材でそのモニタースピーカーの音が出来上がっている。この世界ではその音を出す最善の方法としてこうした試みを是としている」と豪語しています。

☆ そんな世界とは？Ⅲ

最初にお話したように昨今の若者たちは音楽というコンテンツを音楽などを入れるお弁当箱（IC メモリ）、今は使わなくなったタバコのライターぐらいの大きさのもので楽しんでいます。メモリ自体はもっと小さく小指の爪よりも小さい。当然再生時には視覚的に動いているものはありません。一方でレコードやカセットは視覚的要素がおもしろいのです。レトロおやじはタモリさんのCMのように今は「面倒くさいかわいらしいんだよ」となりました。「面倒くさいのが面白い」趣味の世界です。「趣味のオーディオ」世界から様変わりしたのかも知れません。趣味ですからそれでも良いでしょう。話はかわります。筆者は主にアンプ製作や修理を趣味にしています。趣味です！！。したがって良い音で聴こうということよりも聴くための過程を楽しむことが中心です。結果「好い音が聴ければ楽しい」のです。面倒くさい作業を古臭い測定器などを使って楽しむのです。最近暇な時に我が家の蛍光灯をLED化しています。不要な部品を外し配線ルートの変更をするだけの簡単なことです。不要部品が出ます。安定器のトランスとそのトランスを動作させるコンデンサー、それにグローランプの3点です。捨てるのは勿体ないと思うのが昭和レトロのおやじ、考えました。トランスはオーディオ用と全く目的で設計されているので信号回路は当然のこと、電源回路にも使えません。廃棄です。コンデンサーは

見た目スタイルが良くブラックカラーで容量や耐圧がプリントされています。容量は4μF…フルレンジのスピーカーにこいつを使いトゥイーターを追加、音の良し悪しは別として8Ωインピでカットオフ5KHzぐらいでちょうどいいのではと思い残しています。グローは廃棄です。これが「趣味のオーディオ」。また以前にもお話したかもしれませんがハードオフで凄いのを見つけた時のお話です。LUX社のSQ38FDというプリメインアンプです。美品でした。現在真空管アンプは何故か人気で販売当時価格を上回って取引されています。真空管が見えるのなら視覚的な面白さから人気が出るのは理解できますが見えないLUX社のSQ38FDは何故という疑問は残ります。ハードオフ価格は75000円、格安です。説明書を見ると中身が入れ替わっているものでした。もちろん真空管仕様です。想像するとLUX社製のトランス類はオークションなどで非常に高値で取引されています。その部品取りの残骸で余り物ジャンク部品で作ったものなのでしょう。それでこの価格なのだと思います。ジャンク部品で製作する6AR5pp?のアンプでトランス類はメーカー不明?でした。持ち合わせが無く購入はしませんでしたがこのアンプはまさに究極です。筆者の趣味の「オーディオ世界」で考えるとオリジナルよりも価値あるものなのです。部品取りをして再構築した人物の技術力にもおどろかされます。新しく製作するよりも遥かに高いスキルが必要とされます。「趣味のオーディオ世界」のお話です。後日オークションで部品探しをしていたら見つけました。LUX社のSQ38の残骸だけ販売している人物がいたのです。筆者も程度のよさそうな残骸を購入しました。非常に綺麗な残骸でした。中身は空です。暇なときに時間をかけて楽しみたいと思っています。これが「趣味のオーディオ」の世界

☆ カオスな世界で楽しく暮らす。

俗にいうオーディオ業界は現在衰退の傾向にあります。技術の進歩に伴い安価で性能が極めて良いものが市場を席捲しているからです。高級機は売れないのです。今や

この業界は儲からないのです。しかしこの世界には未だ魍魎魍魎が群雄割拠しています。昔の栄華が懐かしいからかもしれません。もう儲からない世界ですから「魍魎魍魎」どうぞお引き取りくださいといった感じです。しかし筆者はこの衰退の傾向は日本の発展や経済の発展とは無関係に考えればそれほど悲観したものではないと思っています。むしろ趣味のオーディオ人にとってはきちんとした切り分けのできる世界がそこに在るような気がします。アマチュア?は趣味ですから何を言っても問題ありません。どんなオーディオ妖怪でもそれなりに面白いのです。プロはそうはいきません。今まで多くの魍魎魍魎が「プロは…」「プロは…」と呪文を唱えてきました。それも終わります。時代は変化して行くのです。昔ラジオでディスクジョッキー（パーソナリティー）が深夜に語る番組が大流行しました。もし当時ポッキヤスがあったら…と考えてしまいます。あらゆる分野でその形態が変わりつつあります。オーディオ業界も同様です。しかし趣味のオーディオ世界は変わりません。趣味ですから。永遠に不滅です。筆者はカオスなこの世界をむしろ楽しんで暮らすのが最高だと思っています。筆者も魍魎魍魎の仲間かもしれませんが、今の若者、レトロおやじを含め趣味人として楽しく暮らして行きたい。逝きたい（老人ですから）と思っています。

☆ 次回は

スタジオ夜話はとりとめ無く様々な音にかかわるお話をしてきました。番外編ではサウンドドラマ制作のお話をしました。電子工作の道具のお話、測定器のお話もしました。時にはサウンドスケープ的に日本の音や街の音、自然の音についてもお話しました。来年はもう少し今までのお話では語りきれなかった点を掘り下げてお話します。

新年1回目スタジオ夜話152回は「音の捉え方、聴き方」についてお話します。今年一年ありがとうございました。引き続き来年もよろしく願いいたします。読者皆様が新年をお元気で迎えられることを願っています。

— 森田 雅行 —